

古代中国をとりまく胡漢諸民族の服飾に関する調査研究
Research on Clothing of Han and Hu Peoples around Ancient China

石松 日奈子*¹⁺, 中川原育子*²⁺, 影山悦子*³⁺
Hinako Ishimatsu*¹⁺, Ikuko Nakagawara*²⁺, Etsuko Kageyama*³⁺

*1 清泉女子大学文学部 東京都品川区東五反田 3-16-21

Faculty of Literature, Seisen University,
3-16-21 Higashigotanda Shinagawa-ku, Tokyo, Japan

*2 名古屋大学文学研究科

Graduate School of Letters, Nagoya University

*3 関西大学アジア文化研究センター

Center for the Study of Asian Cultures, Kansai University

+服飾文化共同研究拠点、文化ファッション研究機構、文化学園大学

Joint Research Center for Fashion and Clothing Culture

Bunka Fashion Research Institute, Bunka Gakuen University

Abstract: Through examination of ancient art and archaeological material found in East and West Asia, and improvement of baseline data for research, this study aims to clarify various characteristics of clothing of Han and Hu peoples. Furthermore a relation between clothing and ethnic identity expressed in clothing, and political and social functions performed by clothing will be considered.

要旨:本研究では、東アジアから西アジア方面までを視野に入れて現存する美術作品や考古資料を調査し、研究の基礎となるデータを整備、胡漢諸民族の様々な服飾の特徴を事例によって明らかにすることを目指す。さらに、人間にとっての服飾とアイデンティティーの関係、服飾が有する政治的、社会的意味や機能についても考えてみたい。

配当決定額

平成 21 年度	1,500,000 円
平成 22 年度	1,300,000 円
平成 23 年度	1,440,000 円
合計	4,240,000 円

研究の目的

東アジアの中心であった中国王朝には古来多くの周辺民族(胡族)がやって来た。それらは中国王朝に朝貢するために派遣された各国の使者たちや、はるばるシルクロードを経て西方からやってきた商人た

* 1) ishimatsu@athena.ocn.ne.jp

ちで、中国の文献には月氏、匈奴、鮮卑、突厥、吐蕃、粟特など、漢字表記の名称で記録されている。また、文献では各族の風俗や習慣、服飾や髪型などについても記述されており、定住型農耕民族の漢族と、移動型あるいは遊牧系の胡族とでは、本来服飾に対照的な違いがあったと推測することができる。

そこで、本研究では東アジアから西アジア方面までを視野に入れて現存する美術作品や考古資料を実査し、研究の基礎となるデータを整備、胡漢諸民族の様々な服飾の特徴を作例によって明らかにすることを旨とする。さらに、人間にとっての服飾とアイデンティティーの関係、服飾が有する政治的、社会的意味や機能についても考えてみたい。同時に、胡族と漢族の服飾が互いに混じり合い、影響し合っていく状況にも注目し、胡漢諸族間の同化、通婚の状況や家族の構造など、服飾文化研究における新たな可能性を見出す。

研究の方法

本研究班は中国、東トルキスタン(新疆地区)、西トルキスタンのそれぞれの地域を専門とする研究者 3 名で組織した。3 年間の研究期間のうち、平成 21 年度は陝西以東の中国、22 年度は甘肅および新疆ウイグル自治区、23 年度はソグド・バクトリア関係の遺物を収蔵するエルミタージュ博物館で現地調査を行い、仏教美術や墓葬美術、考古遺跡等に残る服飾資料のデータと情報を収集する。調査データ(所在、形状、法量、銘文、年代、種族の別等)はパソコンに入力してデータファイルとして整理、保存する。同時に、考古学、美術史、服飾関係の参考文献も網羅的に収集し、各族の服飾状況を分析し、研究を行う。

研究の実施計画

[平成 21 年度]

8～11 月 古代胡漢諸民族の服飾史関係の参考資料、文献検索を行い、必要なものをコピーして整理・保存する。現地調査に備えて作例の所在や保管状況を調査。調査に必要な機材の購入。中国各地の研究機関・研究者に連絡し調査協力を要請。

12 月 中国調査。訪問先:敦煌莫高窟、敦煌研究院(以上、甘肅省敦煌市)、陝西省歴史博物館、西安博物院、陝西省考古研究院(以上、陝西省西安市)、雲岡石窟、大同市博物館(以上、山西省大同市)、山西博物院(山西省太原市)。*敦煌莫高窟、敦煌研究院訪問は、都合により次年度に繰り越し。

1 月～3 月 調査データの整理、保存、分析。次年度の計画と準備。

[平成 22 年度]

5 月 出光美術館分館で同館所蔵木俑の調査(東京都三鷹市)。

6～7 月 各自の担当区域・民族の服飾関連の参考文献や関連資料をデータ入力する。本年度の現地調査について各訪問先の研究機関・研究者に連絡し協力を要請。

9 月 中国調査:9 月中旬の全 15 日間。訪問先:敦煌莫高窟、敦煌研究院(以上、甘肅省敦煌市)、新疆ウイグル自治区博物館、ウルムチ市考古研究所(以上、新疆ウイグル自治区ウルムチ市)、キジル石窟、クムトラ石窟、タイタイル石窟、キジルガハ石窟(以上、新疆ウイグル自治区クチャ・拝城県)、ベゼクリク石窟、高昌故城、トゥルファン市博物館(以上、新疆ウイグル自治区トゥルファン市)。

10 月～3 月 調査データの整理、保存、分析、並びに参考文献、関連資料等のデータ入力。次年度の計画と準備。

[平成 23 年度]

6～7 月 エルミタージュ美術館調査のための参考文献を収集し、美術館の担当者に連絡、協力要請。

7～8 月 エルミタージュ美術館調査:7 月末～8 月上旬の全 8 日間。訪問先:ロシア国立エルミタージュ

美術館(サンクトペテルブルグ)。調査資料:ソグディアナ、バクトリアの壁画、テラコッタ。新疆ウイグル自治区の壁画。コーカサス・南シベリアの服飾資料。ササン朝ペルシアの銀器。

9月～12月 調査データの整理、保存、分析、並びに参考文献、関連資料等のデータ入力。

1～2月 研究成果発表会と報告書作成に向けて、担当分野の研究を進め、報告内容をまとめる。

研究の成果

1. 中国華北、内蒙古 —21年度調査—

<21年度調査の概要>

(1) 平山郁夫シルクロード研究所(鎌倉)(9月30日)

綾錦袍(唐 8世紀)、赤地連珠双鴨円文緯錦靴下(ソグド 7-8世紀)、唐花文白綾靴下(唐 8世紀)を調査。綾錦袍はチベットで発見されたと伝えられ、中国製の綾で作った袍の縁に鹿文錦(ソグド製か)をあしらっている。脇のスリットや襟のつくり等を詳しく観察し、写真撮影を行った。

(2) 淑徳大学書学文化センター(埼玉県入間郡)(12月2日)

大学所蔵の中国石刻拓本のうち、北魏～北周時代の造像記の拓本約 40 件を調査。供養者図像や供養者名、胡服と漢服、胡姓と漢姓の出現状況を調査した。

(3) 中国(内蒙古自治区、山西省、陝西省)調査(12月19～30日)

①内蒙古自治区:内蒙古自治区文物考古研究所(フフホト市)では、東胡、鮮卑族関係の考古資料展示室を見学し、情報を収集した。内蒙古自治区博物院(フフホト市)では、北朝期を中心に胡漢の考古資料を見学。胡服や胡帽(Fig.1)、帯飾りなどの実物資料を調査し、スケッチと写真撮影を行った。また、フフホトの東南 70 キロのホリンゴルで代国(北魏の前身)時代の故城址と盛楽博物館を見学した。盛楽博物館では和林格爾漢墓壁画の復原や、ホリンゴル地区から出土した東胡や鮮卑の服飾資料を見学し、写真を撮影した。

②山西省:雲岡石窟(大同市)において、鮮卑系胡服(Fig.2)や漢服の供養者像、仏教説話図中の世俗人物などを確認し、供養者の服装や構成、配置などを観察し、写真を撮影した。大同市博物館では、方山永固陵や司馬金龍墓、宋紹祖墓などから出土した大量の人物俑、騎馬俑、胡人俑、陶製の動物、石彫、木棺画など観察した。特に俑の衣服を詳しくスケッチした。

太原市では、山西博物院で北魏～唐時代の墓葬や仏教美術の作品を調査した。北魏時代の棺板に描かれた鮮卑風俗の出行図や、鮮卑系胡服の男女俑(Fig.3)や伎楽俑、西方系胡服の雑伎俑(Fig.4)、北齊時代の庫狄廻洛墓、婁睿墓、徐頭秀墓、隋代の虞弘墓から出土した俑(Fig.5)や画像磚などを調査した。仏教美術では造像碑の供養者像を観察した。また、太原市では北齊時代の徐頭秀墓の内部を特別見学した。墓室内には等身以上の大きさの人物像(Fig.6)が描かれており、とくに胡服・胡帽の人物像を中心に詳しく観察した。中国煤炭博物館は石炭に関する博物館であるが、山西省各地の壁画の模写や実物大写真を展示した部屋があり、婁睿墓や徐頭秀墓壁画の模写を見学した。山西民俗博物館では、清朝の服飾展示室を見学し、山西芸術博物館では、山西省内の仏教造像碑約 30 件(北魏～唐時代)について、供養者像や供養者名を確認し、写真撮影を行った。

③陝西省:乾陵博物館(咸陽市)と昭陵博物館(醴泉県)を見学した。乾陵は唐の高宗と則天武後の合葬陵、昭陵は唐の太宗の墓である。乾陵博物館では、開催中の「胡俑展」を見学し、写真撮影を行った。展示作品中の唐時代の三彩釉や加彩の胡人俑を比較検討し、胡人が片腕を服から抜き出した場合の衣

服の処理について理解することができた。乾陵の陪葬墓のひとつ永泰公主墓の内部を見学した。昭陵博物館では、昭陵の陪葬墓から出土した極彩色の武官・文官俑や長いマントを羽織る俑 (Fig.8) などの写真を撮影し、昭陵から出土した十四国蕃君長石像と台座の一部を調査した。西安博物院 (西安市) では、西安北郊のソグド人の墓 (李誕墓、史君墓) から出土した石椁、陝西歴史博物館 (西安市) では同じくソグド人の安伽墓出土の石製葬具が陳列されており、写真撮影を行った。石椁や石屏の表面に施された浮彫は、ソグドや突厥の服飾資料として重要である (Fig.7)。陝西歴史博物館では唐墓壁画収蔵庫を特別見学し、章懐太子墓の外国使節図や、懿徳太子墓の出行図などを観察した。陝西考古研究院 (西安市) では北魏～唐時代の陶俑と木俑を見学、さらに研究院の基地で、新発見の仏教造像と崇陵出土の石人 (君長像か) を特別見学した。

(4) 平山郁夫シルクロード美術館 (山梨県北杜市) 見学 (1月20日)

開催中の展覧会「ガンダーラ — 仏像のふるさと」を見学。石彫やストゥッコ製の供養者像の胡服や胡帽の種類や形状を観察した。

< 考察 >

古代中国では中華思想のもと、周辺の異民族を方角別に東夷、北狄、西戎、南蠻と呼んできた。いっぽう、「胡族」も漢族以外の異民族に対する蔑称であるが、おもに北方や西方の民族に使用された。したがって従来の研究では、「胡服」とは「漢服」に対応する概念として、北方と西方の異民族の服飾全般に対して使用されてきた呼称であった。しかし、本研究で注目したのは、胡服に北方系と西方系の二種が認められること (文献1参照) で、大同の北魏時代の墓から出土した俑や仏教供養者像において、交領筒袖の上衣で垂れの長い帽子をかぶる系列 (Fig.2、3) と、円領筒袖で脇にスリットのある上衣の系列 (Fig.4) という、二種の胡服が認められる。しかも、顔立ちや体格から、明らかに異なる民族を表現しており、前者は鮮卑族、後者は異種の民族 (西方系の胡族) を描き分けていると思われる。鮮卑国家である北魏において鮮卑系胡服は支配者の民族服であり、雲岡石窟をはじめとする北魏平城時代の仏教造像においては、漢姓供養者像も鮮卑服で表現されている事例から、衣服が社会の支配構造をも示していることが分かる。

やがて北魏の漢化とともに服制改革が行われ、鮮卑族が一転して漢服を公服とするようになると、鮮卑系胡服はいったん減少した。これは、支配者が自らの衣服や髪型、さらに祭祀や言語に至るまで、ことごとく被支配者側のそれを採用するという、他に例を見ないできごとである。6世紀代半ば頃から再び鮮卑風俗が復活したが、それはかつての鮮卑系胡服とは異なり、えりのかたち (交領と円領 (開閉式。えりを開いて左右に折り返すものもある) の両方が見られ、着丈が膝下まで長くなり、バックル付きの革製と見られるベルトを締めている点など (Fig.5、6)、明らかに西方系胡服 (Fig.4、7) の影響が認められる。また、敦煌莫高窟第285窟 (538-539年頃) の供養者像壁画には、漢姓の男性が西方系胡服で表現されており (Fig.16)、この頃から西方系胡服が一般的な服装として中国で定着していったと推測される。

唐時代に中国の常服として定着する円領・筒袖の袍衫は、従来北朝の北方系胡族の服装を取り入れて成立したと捉えられ、ペルシャ等西方の影響が現れるのは唐時代からと考えられてきた。しかし、丈が長く、両脇にスリットを設け、えりを開閉させることのできる筒袖の衣服は、北魏平城時代 (5世紀後半) の西方系胡人俑に認められ (Fig.4)、明らかに鮮卑服と区別されている。さらに、敦煌の西魏時代 (6世紀半ば) の壁画中においては、漢族男性がこの衣服で描かれており、西方系胡服の台頭が6世紀半ばに遡る可能性が出てきた。その背景として、近年注目されているソグドやバクトリアといった西方の胡人たちの活躍にも注目すべきであろう。(石松日奈子)



Fig.1

Fig.1 Cloth cap in Hu style, Inner Mongolia Museum 5-6th century 胡帽、内蒙古博物院、5~6 世紀



Fig.2

Fig.2 Male donors dressed in Xianbei Hu style, Cave 13, Yungang Caves, 5th century

雲岡石窟第 13 窟 鮮卑系胡服の男性供養者、5 世紀



Fig.3

Fig.3 Woman dressed in Xianbei Hu style, Tomb of the Northern Wei period, Datong, 5th century

大同北魏墓 鮮卑系胡服の女性俑、5 世紀



Fig.4

Fig.4 Man dressed in western Hu style, Tomb of the Northern Wei period, Datong, 5th century

大同北魏墓 西方系胡服の男性俑、5 世紀



Fig.5

Fig.5 Man dressed in western Hu style, Tomb of Yu Hong, Taiyuan, dated 592.

太原虞弘墓 西方系胡服の男性俑、592 年

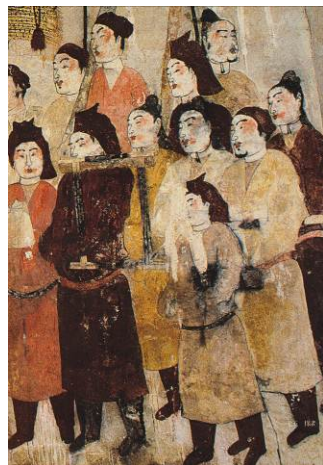


Fig.6

Fig.6 Attendants dressed in Hu style, Tomb of Xu Xianxiu, Taiyuan, dated 571.

太原徐顯秀墓壁画の侍従図、571 年



Fig.7

Fig.7 Sogdian and Turkic men, stone screen, Tomb of Anjia, dated 579.

安伽墓石屏画のソグド人と突厥人、579 年



Fig.8

Fig.8 Man dressed in long robes, Tomb of Tang dynasty Emperor Taizong, Shaanxi, 7th century

陝西省昭陵陪葬墓 長衣の男性俑、7 世紀

2. 東トルキスタン —22 年度調査—

<22 年度調査の概要>

(1) 出光美術館(分館) (5月8日)

出光美術館所蔵の唐俑のうち、加彩木俑4体、陶俑6件を調査。陶俑では簡略化されがちな細部が加彩木俑では繊細に表現され多くの情報が得られた。

(2) 中国(新疆ウイグル自治区、甘粛省) (7月30日～8月13日)

① クチャ周辺の石窟寺院(新疆ウイグル自治区アクス地区拝城県、庫車県):クチャ郊外に多数ある石窟寺院の中から、キジル石窟、キジルガハ石窟、クムトラ石窟で、供養者の作例が残る窟を中心に調査した。この地域は古代亀茲国と呼ばれ、西域北道を代表するオアシス都市国家であった。供養者の形姿は当時の亀茲国に住む人々の風俗をダイレクトに反映したものとなっている。

特徴的なのはまずその髪型で、眉の上で短く切りそろえ、中央で左右に振り分け、額を広く見せる(Fig. 9, 10)。『隋書』や『旧唐書』によれば、国王のみ長髪で、俗人は項(うなじ)で短く切りそろえたとある。男性供養者の髪型をみると、ある時期から身分の上下に関わらず、項のところで長い髪をリボンで束ねるスタイルが流行したようである(Fig.10)。襟の形も様々で、片側に折り返した襟の形がコの字形を呈するもの(Fig.11)、片側に折り返した襟が三角形を呈するもの(Fig.10)、襟を両側に開くもの(Fig.9)、片側に折り返した襟の先に長い紐をつけそのまま長く垂らすものなどがある。

キジルと他の石窟寺院の供養者と比べて特徴的だと思われるのは、王族と一般世俗人物との間に、その服装から観てそれとはっきり区別できるほど差異が表現されている点である(Fig. 9,10)。Fig. 9では、男性は開襟で左衽、肩飾りとラップ状の袖のついた長衣を纏う。両側には深いスリットを施し、かなりデコラティブなデザインとなっている。腰にベルトをつけ、布の付いた小刀やハンカチのような布をつりさげる。女性は男性同様開襟で左衽、ラップ状の袖のついた長衣を纏うが、ドレスのように裾が大きく広がっていること、ベルトを付けないという特徴がある。王族以外の身分の低い俗人の服装は片側に襟を開き、中央で打ち合わせた長衣を纏い、袖や襟の扱いがシンプルに処理されている(Fig. 10)。

説話図に登場する胡服の人物については、白い三角帽を被り、円領や開襟の胡服を纏っている商人は(Fig.12)、本研究班研究分担者の影山によれば、ソグド商人のイメージを反映した表現であるという。

支配者が異民族に変わると供養者の民族にも変化が生じる。クムトラ石窟、シムシム石窟では、漢人、ウイグル人の供養者を確認でき、漢文、ウイグル文字、ウイグル語の題記が附されている場合もある。

② トゥルファン(新疆ウイグル自治区吐魯番市):2009 年末に新装オープンしたトゥルファン市博物館の常設展とベゼクリク石窟を調査し、高昌故城、アスターナ古墓遺址も見学した。トゥルファン市博物館では近年の発掘品を中心に展示が構成され、服飾資料としては、アスターナ古墓(トゥルファン)、巴達木古墓(トゥルファン)、蘇貝希(蘇巴什)古墓(鄯善)、洋海古墓(鄯善)の出土遺物が特に注目される。

今回調査したベゼクリク石窟は、その開鑿年代が何時頃まで遡るのかは判然としないが、現存する供養者の作例は、すくなくともウイグル支配時代以降のもので、ウイグル人(Fig. 13)、蒙古人、突厥人の例が報告されている。誓請願図を表す壁画に、仏陀を供養する胡商を描いた例がいくつか知られ、その中の一例をみると(Fig. 14)、衣服の基本的構造は同じだが、瞳や髪の色、髪型など描きわけが見られる。

③ 新疆ウイグル自治区博物館(ウルムチ市):新疆ウイグル自治区博物館では、常設展に加え、「瀚海霓裳—西域服飾的記憶—」と題した服飾を専門に扱った展示が新たに設けられていた。修復を終えた衣料が多数展示されており、3000年前のものから現代まで、新疆の服飾の歴史や近年の研究成果が一望できた(Fig. 15)。とくに西域南道のロプノール周辺、且末、ニヤなどの古墓遺跡のミイラが纏っていた服

飾資料は、タリム盆地に最初に居住していた人々の民族、風俗を知る貴重な手掛かりとして注目される。

④敦煌莫高窟石窟(甘肅省敦煌市):敦煌莫高窟は、北涼～五代・宋までの各時代を代表する石窟の中から供養者像を描く 30 窟を厳選し調査した。敦煌は、支配者である鮮卑系氏族と被支配者の在地の漢人豪族、西方系胡人とが共生する地域もあり、その関係性は複雑であったが、服飾研究によって次第に明確化されつつある。その中で 5 世紀後半から 6 世紀にかけての動向について紹介する。まず、北涼時代とされてきた第 275 窟は、供養者の服飾分析から鮮卑服を着た人物群像 (Fig.17) であることが明らかとなり、北魏時代の石窟とみなすべきとの見解が当研究班研究代表者の石松から出された。さらに石松は、第 285 窟の北壁の供養者像と供養題記を分析し、高位の漢化した胡族、あるいは漢族、在地漢族の有力氏族(陰氏)とソグド人女性(史姓)の混成集団、胡族(滑氏)が、それぞれ時期を前後して寄進し制作させたプロセスを明らかにしている (Fig.16)。この研究によって、北魏後期以降女性は胡族出身であっても漢服を纏い、男性は漢服、胡服の両方が着用されていたことになる。見た目には漢服を着ていても、軽々に漢人とは断定できなくなる。さらに、これまでひとくりに胡服とされてきた服装も、大きく二種の系統の存在が明らかになった。すなわち、垂れの付いた鮮卑帽をかぶり、スリットの付かない交領の長衣を纏うタイプ (Fig.17) と円領に中央で左右に開く作りの長衣をまとう男性胡服のタイプである (Fig.16, 18)。前者は鮮卑系胡服の系統であり、後者は西方系胡服の系統で、敦煌における後者の出現は西魏以降であることも指摘している。

(3) 韓国国立中央博物館(ソウル)(2/10~13)

韓国国立中央博物館の調査は、本年度の実施計画に入っていなかったが、同館は、1915 年 5 月に朝鮮総督府に送られた大谷コレクションを所蔵すること、また、特別展「シルクロードと敦煌」を開催していたため、急きょ同館の調査を実施した。大谷コレクションの中から、服飾研究に有益と判断された 9 件の文物を調査した。特別展「シルクロードと敦煌」には、新疆の文物が数多く出陳され、現地調査においても目にする事のなかった木俑、陶俑、服飾資料を観察し記録することができた。また、サムスン美術館 Leeum では、サムスン創設者が収集したコレクションの中から仏教美術、工芸品を中心に調査した。

<考察>

クチャとトゥルファンはいずれもタリム盆地に栄えた代表的なオアシス都市国家であり、クチャのトカラ仏教がトゥルファン仏教に影響を与え、人的な交流も盛んであったことが、石窟の銘文、漢文史料や出土文献の分析によって知られている。しかし、服飾の観点からみると、その展開には大きな違いがみられる。

トゥルファンは、経済的、軍事的な重要拠点として北方遊牧民族と漢民族との間で争奪が繰り返され、たびたび支配王家が交代した。640 年この地域が唐の支配下にはいると、アスターナ古墓群から出土した俑や絹画の人物の服飾は、「漢服」であれ、「胡服」であれ、唐時代に長安で流行したファッションを反映したものとなっている。唐の影響の強さを感じさせる。トルコ系遊牧民族であるウイグルは、モンゴル草原にいた時代からソグド人を介して唐文化を取り入れてきたこともあって、ウイグル男性は唐で流行した丈の長い胡服を纏う。しかし、その髪型は漠北以来の辮髪(辮)の風をなお残し、前が低くて後ろが高い特徴的な冠を被り、一目でウイグルとわかるようになっている。髪型や冠(帽子)などは民族のアイデンティティーと密接にかかわり容易に改変し難いものだったといえる。

一方亀茲国は突厥の間接的関与を受けたり、唐や吐蕃の支配下におかれたりしたが、紀元後 1 世紀末から 8 世紀ごろまで、百姓を名乗る王家が基本的に代々統治し、トゥルファンのようにドラスティックに支配層が交代するようなことはなかった。服飾の観点からみるならば、筒型の長衣、前開き型の長衣の両方の形式がみられ、いずれも両脇にスリットをつけたカフタンと呼ばれる形式の衣服である。トハリスタンから中央アジア、トゥルファンに至るまで男女を問わず着用されていた基本形ともいえるものである。襟の形は、

トハリスタンのエフタルの風習と共通する右襟を三角形に折り返すもの、突厥と共通する左右に折り返した襟をつけたものなどがみられ、中央アジアを支配下に置いた遊牧民族の風俗を採用しているといえる。つま先だった姿で描かれるキジルの供養者の姿は、マルシャク氏、井上豪氏が指摘しているように、遊牧民の騎馬の風習を取り入れた結果とも考えられる。クチャに限らず、西域のオアシス定住民と遊牧民とは衣食の生産物の交易や領域内の移動の保障など共依存関係にあり、服飾に現れた両者の関係についてより詳細に検討する必要があるだろう。(中川原育子)

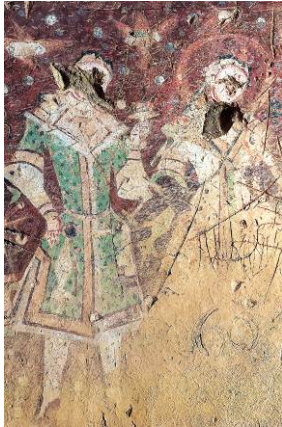


Fig. 9



Fig. 10



Fig. 11



Fig.12

Fig.9 Donors of the Qiuci royal family, Cave11, Kizilgarha Caves, 6th-7th century

キジルガハ石窟第11窟 亀茲王侯供養者、6-7世紀

Fig.10 Qiuci layman donor, New Cave 1, Kizil Caves, 6th century

キジル石窟新1窟 亀茲世俗供養者、6世紀

Fig.11 A portrait of painter, Cave 207, Kizil Caves, 5th-6th century キジル第207窟 画家像 5-6世紀

Fig.12 Merchant depicted in a jataka scene, Cave 38, Kizil Caves, 6th century

キジル石窟第38窟 本生図中の商人、6世紀



Fig. 13



Fig. 14



Fig. 15

Fig.13 Uyghurian prince and princess, Cave 20, Bezeklik, 11th-13th century

ベゼクリク石窟第20窟 ウイグル王侯供養者、11-13世紀

Fig.14 Hu merchant depicted in a pranidhi scene, Cave 31, Bezeklik, 11th-13th century

ベゼクリク石窟第31窟 誓願図中の胡商、11-13世紀

Fig.15 Woolen dress with opening at neck, Zaghunluq, Qiemo, 8th-2nd BC

毛織被り着ワンピース、且末扎滾魯克出土、前8-2世紀



Fig. 16

Fig.16 Female donor dressed in Han style is of Hu people, male donor dressed in western style is of Han people, Cave 285, Mogao Caves, Dunhuang, mid -6th century

敦煌莫高窟 285 窟、漢服の女性は胡人、西方系胡服の男性は漢人(6 世紀半ば)



Fig. 17

Fig.17 Donors dressed in Xianbei Hu style, Cave 275, Mogao Caves, Dunhuang., 5th century

敦煌莫高窟 275 窟、鮮卑系胡服供養者、5 世紀



Fig. 18

Fig.18 Male donor dressed in western Hu style, Cave 428, Mogao Caves, Dunhuang, 6th century

敦煌莫高窟 428 窟、西方系胡服供養者、6 世紀

3. 西トルキスタン —21、23 年度調査—

<23 年度調査の概要>

ロシア(国立エルミタージュ美術館)調査(7/30~8/6)

最終年度である 23 年度は、おもに西トルキスタンのソグド、バクトリアの服飾資料を調査した。ソグド人は「シルクロードの商人」として知られるが、その本拠地はサマルカンドを中心とする地域であり、現在のウズベキスタンとタジキスタンの一部にあたる。バクトリアはソグドの南の地域で、現在のウズベキスタン南部、タジキスタン南部とアフガニスタン北部にあたる。この地域はソ連邦時代に大規模な発掘が行われ、出土品の大半は現地の博物館ではなく、ロシア国立エルミタージュ美術館が保管している。そのためエルミタージュ美術館を訪問し、ソグドとバクトリアの壁画、塑像、銀器、染織品などを重点的に調査した。また、シベリアやコーカサスの墓から出土した服飾品、新疆ウイグル自治区クチャ、トルファン石窟寺院の壁画なども合わせて調査した (Fig.18)。

(1) ソグド、ペンジケント遺跡の壁画:サマルカンドの東 60km に位置するペンジケント遺跡は、5 世紀から 8 世紀半ばのソグド人の都城址である。すでに半世紀以上にわたり発掘が続けられ、王の宮殿址、ゾロアスター教の神殿址、住居址から、壁画が発見されている。このうち、当時の人々の服飾を伝えるのは、神殿や住居に描かれた儀式的場面に登場する供養者像と、住居に描かれた祝宴の場面に登場する人物像である。

500 年頃に描かれた供養者 (Fig.19) は、前合わせで膝までの長衣を身につけ、ズボンとブーツをはき、ベルトに短剣を下げている。7 世紀の供養者 (Fig.21) は、縁取りのある赤色の長衣の両襟を大きく開き、ベルトに長剣と短剣を下げているが、8 世紀初めに描かれた供養者 (Fig.22) は、Fig. 19 と同じ丸襟の長衣を身につけている。ペンジケント壁画に描かれた供養者の服飾は、当時の供養者の実際の服飾を表していると考えられる。しかし、6 世紀に描かれた供養者 (Fig.20) は、他の供養者とは大きく異なり、彼らの視線の先にある神格に近い服装で描かれている。

ペンジケントの住居の客間には、着飾った男性が絨毯の上に胡座し、金の酒器を持って祝宴を催す場

面が描かれることが多い。左衽の長衣を身につけ、ベルトに短剣を下げ、ブーツをはいている。7世紀の祝宴の場面 (Fig.23) に登場する男性の長衣は、中国製の赤、青、白、黄、茶色の綾で作られ、錦で縁取りがされている。襟を開いて着ることも、閉じて着ることもできたことが分かる。8世紀前半の作例 (Fig.24) では、長衣の合わせの部分の縁取りが細く、それにとまって襟も小さくなっている。赤色の長衣の人物は、右襟だけを開き、左襟は閉じている。住居の主人は、自らの経済的・文化的な豊かさを客人に誇示するために、当時流行していた最高級の絹織物(錦、綾)を、はっきりそれと分かるように描かせたと推測される。平成21年度に平山郁夫シルクロード研究所にて実物調査した綾錦袍は、まさにこのタイプの長衣である。

(2) バクトリア、アジナ・テパ遺跡の壁画:ソグドの南のバクトリアでは、8世紀半ばまで仏教が主要な宗教であった。タジキスタン南部の仏教寺院址であるアジナ・テパ遺跡では、供養者2人の坐像を表す壁画 (Fig.25) が発見されている。白い長衣を着て黒いブーツをはき、ベルトから長剣と短剣を下げている。

エルミタージュ美術館の収蔵品ではないが、バクトリアの服飾を示す資料は、他に、クシヤン朝時代の王侯を表す塑像(ウズベキスタン、ハルチャヤン)、エフタル支配期の貴族の祝宴を表す壁画(同、バラリクテパ)などがある。平成21年度には、平山郁夫シルクロード博物館でガンダーラの彫刻や塑像を調査したが、そこに表現される供養者の中には、ひざ丈の貫頭衣を着て腰にベルトを巻く、クシヤン族の服装の者も認められた。バクトリアの服飾資料はあまり注目されていないが、遊牧民であるクシヤン族やエフタル、その支配下にあった民族の服飾を伝える貴重な資料である。

(3) シベリア、コーカサスの服飾資料

南シベリアのパジリク古墓群で発見された紀元前5~3世紀の服飾資料、北コーカサスのモンチェバヤ・バルカ古墓群で発見された8~9世紀の服飾資料 (Fig.26) の調査、写真撮影を行った。

<考察>

ソグドと中国は相互に文化的な影響を及ぼしていたことが、7世紀から8世紀に製作された銀器の研究によって指摘されているが、そのような影響関係は服飾資料の研究によっても認められる。700年前後の唐で胡服が流行したことはよく知られているが、ちょうど同じ頃ソグドでは、中国製の綾で仕立てた長衣が流行したことが壁画から判明する。

また、近年中国の西安や太原でソグド人の墓が発見され、宴会や狩猟の場面を表した石製葬具が出土したことにより、6世紀後半に中国に居住したソグド人の服飾資料が急激に増加した。現在、ソグド現地では同時代の服飾資料が、わずかしかなかったため、これらは6世紀のソグド人の服飾を示す貴重な資料であると考えられている。しかし、この時代のソグド現地における服飾と、中国在住のソグド人の服飾が同じであったかどうか、慎重に検討しなければならない。そのうえで、ソグドにおける服飾の変化と、中国に移住したソグド人の服飾の変化が一致しているのかどうかを考察する必要がある。

いっぽう、2世紀前後のバクトリアの塑像やガンダーラの石彫には、当時の支配者であるクシヤン族の服飾をした供養者が見られる。ただし、クシヤン族が仏教を信仰していたことを示しているのか、それとも土着のバクトリア人が、支配者である民族の服飾を受容していたことを示しているのか、図像資料だけで判断するのは難しい。この地域の文献研究、歴史研究の成果、また北魏における鮮卑服の受容に関する研究の成果を参考にして、慎重に検討したい。

バクトリアに拠点をおき、5世紀後半から100年ほどの間、中央アジアの広大な地域を支配したエフタルもクシヤン族と同様に遊牧民族であるが、支配下の定住民族の服飾文化に影響を与えた可能性が指摘されている。バクトリア、ソグド、クチャの造形資料を比較検討し、エフタル支配期に共通して流行する着衣法や冠について明らかにしたい。(影山悦子)



Fig.19



Fig.20



Fig.21



Fig.22

Fig.19, 20 Donors depicted in a Zoroastrian temple in Pendzhikent (Fig.19 ca 500; Fig.20 6th century)

ペンジケント、ゾロアスター教神殿に描かれた供養者 (Fig.19 500 年頃、Fig.20 6 世紀頃)

Fig.21, 22 Donors depicted in a private house, Pendzhikent (Fig.21 7th century; Fig.22 early 8th century)

ペンジケント、個人の住居に描かれた供養者 (Fig.21 7 世紀、Fig.22 8 世紀初)



Fig.23 Banquet scene depicted in a private house, Pendzhikent, 7th century

ペンジケント、個人の住居に描かれた祝宴図、7 世紀



Fig.24

Fig.24 Banquet scene depicted in a private house, Pendzhikent, first half of 8th century

ペンジケント、個人の住居に描かれた祝宴図 8 世紀前半



Fig.25

Fig.25 Donors depicted in a Buddhist temple, Adzhina-tep, early 8th century

アジナ・テパ、仏教寺院に描かれた供養者 8 世紀初



Fig.26

Fig. 26 Caftan from Moshchevaya Balka burial, Northern Caucasus, 9th century

北コーカサス、モシチェバヤ・バルカ古墓群から出土した長衣, 9 世紀

参考文献

1. 石松日奈子:「2009 年度龍谷大学史学会総会講演録 敦煌莫高窟第 285 窟北壁の供養者像と供養者題記」『龍谷史壇』第 131 号、pp.43～87 (2010)
2. 石松日奈子:『古代中国・中央アジアの仏教供養者像に関する調査研究』平成 20 年度～22 年度科学研究費補助金、基盤研究(C)研究成果報告書』(2011)
3. 曾布川寛・吉田豊(編)『ソグド人の美術と言語』臨川書店 (2011)
4. 中川原育子:「クチャ地域の供養者像に関する考察—キジルにおける供養者図の展開を中心に—」『名古屋大学文学部研究論集』哲学 45, 89～120 頁 (1999)
5. 中川原育子:「キジル研究の現在—キジル石窟の現場と日本におけるキジル研究を中心に—」『張愛紅・シルクロード・亀茲石窟壁画模写展覧会』カタログ (2010)
6. 影山悦子「粟特人在亀茲:從考古和図像学角度來研究」『粟特人在中国—歴史、考古、語言的新探索』中華書局、pp.191～204 (2005)
7. 八波浩一:「中国木俑資料集成と唐代木俑考試論—付・加彩官人(女)木俑像修理報告」『出光美術館研究紀要』第 6 号、pp. 175～210 (2000)
8. 阿迪力・阿布力孜:『新疆古代服飾芸術』新疆新華書店 (2009)
9. 韓国国立中央博物館:『シルクロードと敦煌展』カタログ (2011)
10. 井上豪「キジル第 8 窟寄進者像の服飾に関する諸問題」『秋田公立工業短期大学紀要』第 12 号、pp.33～47 (2007)
11. Boris I. Marshak, L'art iranien, sogdien et sérindien, La sérinde terre d'échanges: Art, religion, commerce du I^{er} au X^e siècle, La Documentation Française, Paris, pp.25-36, 2000.
12. 沈從文『中国古代服飾研究』(2002)